

⑩ ドリームハイツでの長期ビジョンづくり

1 自主保育からスタートし輪が拡大 —第一ステップ

ドリームハイツは、戸塚区のはずれに位置し、泉区と藤沢市に接した、J R 戸塚駅からバスで約二十分のところにある市・県住宅供給公社の分譲マンション群（二十三棟）である。昭和四十七年から四十九年にかけて入居した二千三百戸、七千人の大規模団地であるが、当初からあった公共施設といえは深谷台小学校くらいで、病院も商店も保育園もない、ないないづくしの生活環境であった。

それならと幼児をもつ母親たちが声をかけ合って、「自分達のことでは自分達で育てよう」と三歳児の幼児教室「たけのこ会」（昭和四十九年）がスタート、一年後、四、五歳児の幼児教室「すぎのこ会」が中古のバスとプレハブを利用してはじめられた。この母親達の自力での活動の輪は、小・中学校のPTA、こども会、親子劇場、自治会などの活動にも引き継がれ、障害をもつ子と親を孤立させてはいけなさと「水曜の会」（昭和五十八年）ができ、その後も、すぎのこ会の卒園時のお父さん達が「こどもと遊ぼう」をスローガンにつくった「おやじの会」（昭和五十九年）や、若いお母さん達の子育てを応援しよ

うと〇〜三歳児の親子の遊び場「ありんこ」（昭和六十一年）などが発足した。次第に、主婦中心の人間関係をベースにおきながらも、個別活動ごとの幅広いネットワークが形成され、昭和六十年には、たけのこ会・すぎのこ会・なかよし幼稚園・苗場保育園などが行っていた「芽の勉強会」からの声を受ける形で、子育て・自然・ゴミ・福祉などの生活課題をテーマに様々な立場の人が話し合う場として「地域のつどい」の活動がはじまり、現在に至るまで重要な役割を果たしてきている。

2 地域給食の会など高齢化への対応 —第二ステップ

平成二年発足した「ドリーム地域給食の会」は、平成元年七月開催の地域のつどいで、調理師の免許をもった一人の主婦が提案。高齢者のために給食サービスをやりたいという提案は、地域のつどいの有志が全面的に協力、すぐに市役所・区役所・社会福祉協議会などとの協議を開始、同年十一月には準備会が発足した。準備会を中心に、スタッフ会員募集、需要調査、県自治会との話し合い、試食・説明会などを矢継ぎ早にこなし、提案から十か月、平成二年五月には月一回の給食を開始、

同年十一月から月二回の給食を実施、県・市自治会や社協などからの助成措置を受けながら、現在では月二回の会食と週一回の配食、敬老会の弁当づくりなどを行っている。

また、平成六年七月発足の「ドリームふれあいネットワーク」は、広い福祉活動を目的とする非営利の互助組織で、管理組合理事を務めた一人の女性の発案でできた。みずから姑の介護経験を思い出し、介護する人の負担が少しでも軽くなるシステムをつくらうと、自治会長・自治会役員・地域のつどいの構成メンバーなどに呼びかけ発足。サービス対象者は高齢者だけに限定せず、困っている人はお互い助け合おうという理念のもと、地域住民に呼びかけ会員を募集、簡単な家事援助、通院・外出介助、ワープロ打ちなどの生活支援を有償でやりとりする事業体である。

3 行政や周辺地域との協働関係づくり —第三ステップ

① 行政との協働関係
「地域のつどい」は、平成五年、都市計画局都市デザイン室が前年から開始した地域まちづくり推進事業の活動資金助成を受け、新しい活動に取り組む転機を迎える。活動助成

私達のまちの探検ウォーク



を受けたことで、専門家を招いた勉強会や他地区の見学会などが開催でき参加者の意欲喚起ができたことや、自分達の活動を冊子にとりまとめる作業を通して、より大きな視点の重要性が認識できたこと、地域のつどいの認知度が高まったことや組織基盤が整備されたことなどが成果として指摘されている。

活動成果をほかの助成グループ（合計二十三グループ）と一緒に発表、討議する場として、平成五年十一月、「よこはま市民まちづくりフォーラム」が開催されたが、この企画に参加する中で他区の活動グループとのネットワークが形成された。平成六年十月開催の「戸塚まちづくりフォーラム」では、六月当初から企画委員会に参加、区民会議や区内の活動グループの他、区役所・都市計画局・福祉局などの多様な行政セクションとの協働関係が築かれたといえる。これらのフォーラム企画に参加することによって、これまでの活動にとらわれない行政との協働関係が形成され、市内や戸塚区内の活動グループとの情報交換や交流、専門家との関係強化などが進んだとのことである。

その後、都市計画局や市民局などが開催するまちづくりフォーラムやその企画には参加を呼びかけられるようになり、平成七年十二月、日本都市計画学会・都市計画局主催の「都市計画マスタープランと市民参加」をテーマとするフォーラムには、大正地区連合町内会やハイッの両自治会長と一緒に一つの討議グループとして参加、「自治会町内会とテーマ型それぞれの地域活動が協調してまちづくりをすすめるためには」をテーマにハイッ内

での取り組みが紹介され、議論された。

また、平成七年八月からは、都市計画局がまちづくり活動支援策を市民参加で検討する「まちづくりセンター検討会」にも参加、その支援により後述する長期ビジョンづくりに建築局の「まちづくりコンサルタント」の派遣を三回実現し、行政との協働関係の輪は広がりをみせている。

② 周辺地域との協働関係

地域のつどいなどのテーマ型活動においても、これまで、自治会に限らず大正地区連合の範囲で連携を図ってきている。地域給食の会のように、当初から大正地区社協の支援を受けたり、聖母の園の配食サービスを手助けしたり、様々な形で連携関係を築いている。

さらに、最近では、すぎのこ会の自主保育に周辺住民が多く参加したり、ドリームふれあいネットワークの利用会員・協力会員に周辺住民が多く参加するなど、ハイッの内外を問わない幅広い交流が進みつつある。

こうした周辺と連携する動きは、十回に及ぶ準備の末、平成七年五月実施されたワークショップ「わたしたちの街の探険ウォークとガリバーマップづくり」で一気に高まりを見せた。これは地域のつどいが自治会と共催で実施したイベントで、ハイッの住民以外にも周辺や他地域、行政からの参加も集め総勢約百五十名と大盛況であった。三方面別の周辺地域の街歩きでは、地元の古老にガイド役を依頼、それ以来周辺との協働的な関係は今まで継続しているという。

平成七年十一月から平成八年三月まで五回

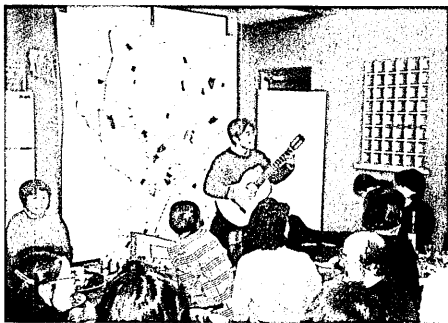
にわたる（仮称）戸塚西公園のワークショップは、地元深谷町や俣野町などの周辺地域とドリームハイッの住民が相互に意見を交換しあう絶好の機会となり、参加者の提案によるデイキャンプを試行するための第一回実験事業「竹の子まつり」（平成八年四月）の企画、実施を通して、協働関係はより一層深まったようである。

今後、ドリームランド線（HSS T）の再開に伴い、大正地区におけるドリームハイッの拠点性が強まると予想され、福祉から緑の問題までの幅広い活動のネットワーク化が大正地区連合という単位で進展しそうであり、多様な地域・住民が相互に共存できる条件が整いつつある。

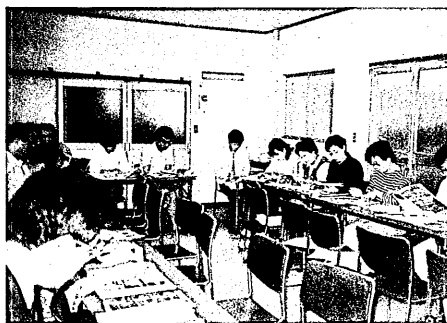
4 自治会と一体的に取り組む長期ビジョンづくり

自主保育から地域給食などの活動グループは、あくまでドリームハイッという地域の中で活動してきたことから、第二集会所内での厨房づくり、集会所の優先使用・無料化、敬老会の弁当づくりといったように、自治会や管理組合との良好な関係を築きあげてきている点が大きな特色である。ハイッ内においては、高齢化が次第に身近な大問題になり、大規模修繕や建て替え問題が重くのしかかってきつつあり、ドリームランド線の再開や駅周辺の大規模開発などの動きもあって、地域の将来を展望する必要性が多く、住民に認識されはじめている。平成五年七月実施された「自治会設立二十周年記念事業アンケート」

地域のつどい主催の楽しかった「忘年会」



学習会には自治会や管理組合の役員も参加



調査結果は、このことを雄弁に物語っている。記念事業の要望で最も多かったのは、「ハイツの長期ビジョンの策定」(四百八票)で、次いで「図書館・娯楽室の設立」(二百九十八票)、「クラブハウス設立プランの策定」(二百三十五票)、「身体障害者への補助器具の寄贈」(百四十八票)であった。自治会や地域のつどいはこの結果を重視、これまでの様々な活動を相互に協働させながら、さらに活動の輪を広げ深化するためにも、長期ビジョンづくりは欠かせないと判断、これに取り組み準備をはじめたのである。平成七年五月末、県自治会特別委員会準備室は、生活環境・自治会規約見直し・防災の三部会での長期ビジョンづくりを周知、これらへの参加者を公募した。同年七月、長期ビジョン特別委員会が発足、ビジョン全体の組立てを行っている生活環境部会では月一回ペースで開催、これまでドリーム開発への要望書作成、長期ビジョンの枠組み検討、住民アンケートやワークショップの内容検討などを行っている。検討作業の中では、まちづくりセンター検討会の支援やまちづくりコンサルタントの派遣を受けた他、実施予定のワークショップを担う人材づくりの一環で戸塚区生涯学習講座「みどりの学校」に受講生を送り込んだとのこと。

こうしてドリームハイツでの一連の活動を振り替えると、「個人の生活を犠牲にせず、誰もができる範囲で、できることをする」という協働の精神で貫かれているのがわかる。さらによれば、これまでの二十五年に及ぶ個々の活動とそれらのネットワーク的な取り組みは、わが国におけるネットワーク型の新しい社会像の模索の歩みでもあるといえよう。

平成八年四月には、高齢者や障害者などがぶらりと立ち寄れる交流サロン「夢みん」が開設され、長年の夢であったケア付きコミュニティセンターづくりへの一歩が踏み出されている。今後は、区社協の協力による車椅子の階段昇降機「スカラモビル」の試用、福祉のまちづくり市民フォーラムへの参加などを進めながら、全世帯を対象とする住民アンケート調査、障害者やサークルなどへのピアリング調査、緑や子育てなどをテーマにしたワークショップを連続的に実施し、「緑と共生し、コミュニティ豊かな、人に優しいまち」といった地域の将来像を共有化し、その目標に向けた個々の活動の活性化と協働化を図ると、日夜奮闘している。

図 「地域のつどい」の協働関係

